

民話

赤い真珠

平成十八年(二〇〇六)十月二十九日

尾道 中村大二

表紙に「民話」と表しました。

これは 私の願望です。

後世迄語り継がれることを願うところです。

言葉の解釈

三頁 アエ松葉 Ⅱ 落ちた松葉

(敢えなく最期を遂げる)

六頁 アタイ Ⅱ 私

九頁 仙人 Ⅱ 死なない術を持っている人

十二頁 オジャシタ Ⅱ いらつしやいました

十三頁 左より縄 Ⅱ 普通の縄の逆によつた縄

(例・神社等のしめ縄、神仏に捧げる縄)

【出遇い】

むかし昔 薩摩の国、平尾村というところに一人の年寄りがおりました。

磯辺の大きな松の木の下に粗末な小屋を造り、そこで毎日藁で縄を編っていました。

でも少しだけ目が不自由だったそうです。

その傍で、兄・妹と思われる二人の子供が、毎日しやがみ込んで年寄りの藁仕事を飽きることなく見ていました。

子供の兄者が年寄りに聞きました。

「爺い 毎日縄を編ってなにをするのか？」

子供は はじめて年寄りに声をかけました。

「なあんだ お前達 口が利けるのか？ ウン この頃なあ 畑のキュウリを盗む悪い

奴がいてなあ、そいつを捕まえて この縄で縛り上げようと思つて 縄を作つている

ところなんじゃ！」

二人の子供は少しビックリしましたが、平気を装い、

「オ、オ、俺達なあ 爺いがどんなに 長い長い縄を作つても、俺達 遠いところまで泳いで逃げるもんなあ」

と兄者は

妹に同意を求めしぐさをしながら 真剣な顔を見合わせ、腰は半分

浮き立っていました。年寄りは

「い、やー いやー！ お前達を縛ると言っているのではない、キュウリ盗人を縛るのじ

やー、お前達は利口そうな子供だから お前達を縛ると言っているのではない！」

COPY

「あつたりまえだ、俺達キュウリなど盗らないもんなあ！」

年寄りはそのような話をしながら、長い長い縄を造り終えました。

「さあつて 出来上がったぞ！ 幾尋あるか測ってみろ！」

と言つて 年寄りは兄者に縄を渡しました。

兄者は 立ち上がつて縄を手に持ち、一尋、二ひろ、三ひろ と測り始めました。

百尋、千尋と進みましたが、測つても測つても 一向に終わりがありません。

兄者は すっかり疲れて 今にも逃げ出そうとしています。

その時、妹が立ち上がり 頭をかしげ暫く考えていましたが、

「兄やん！ 何か変だよ！ アタイ さつき縄の縫り目に アエ松の枯葉を挟み込ん

でおいただけ、この目印の枯葉が 何回も何回も廻ってくるよ！」

と 更に考え込んでしまいました。

その時、年寄りは立ち上がり 突然大きな声で

「お前は賢い！ 爺イの謎を解く子供はこの辺りにはいない！」

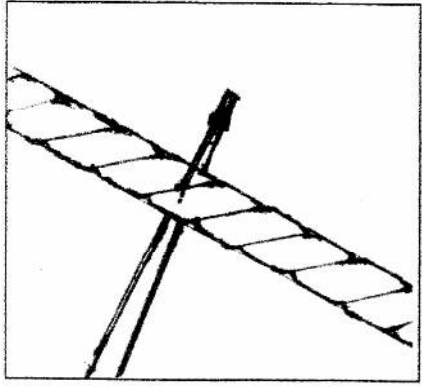
と言つて 何ども繰り返し褒めていました。

年寄りの縄は、輪ゴムのようになっていて

測つても測つても切れ目のない、謎の輪の

縄になっていたのです。

子供の兄者は



copy

「爺イ ずるいぞ！」と言つて その場へたり込んでしまいました。

今度は、年寄りの方から 子供達に聞きたいことがありました。

【二人の子供の本当の姿】

「お前達は、度々磯の瀬の潮水を柄杓で汲み、頭から被っているが何故なんじや？」

と聞きました。

二人の子供は「しまった」といった表情で困っていましたが、こうなった以上は正直に全部話すことにしました。

「爺イ！ この皿が見えないか？」と言つて 頭を見せました。

年寄りは 先ほどの松の枯葉が見えないほど 目が悪くなっていました。

「爺イ 俺達 本当は河童なんじや！ 皿の水が乾いたら生きて行けんのじや、畑の

キュウリを盗っているのも俺達じや、濟まなかつた、今までのことは全部謝る、これ

から友達になつてくれなあ、なあ 爺イ！」

年寄りは 目を凝らして、二人の姿を一生懸命に見回しました。なるほど頭の

てっぺんには皿があり、目が大きくて 全く瞬きしない、その上手の小指の先が曲が

つています。まぎれもなく河童でした。

年寄りには、この小童目がと思いましたが、正直に白状し 謝りましたので、友達に

なることを約束しました。

COPY

友達になるからには お互いの名前を知らなくてはと思い、年寄りから先に名乗り
ました。

「わしはなあ、この平尾村の新五郎と言う者で、村の翁・庄屋を司どっている者じ
や、今までの縄綱い年寄りとは違つて、胸を張り 威張つています。

」ところで、お前達の名前は何と言うのか？」 河童兄妹は一寸困りました。

河童の兄妹には 名前がなかつたのです。 新五郎爺は二人に名前をつけることに

し、兄は大寿丸、妹を千代と呼ぶことにしました。

小童の大寿丸は、新五郎爺さんに「これからは『シンゴジ』と呼ぶから 気を悪
くするなよ！」と言つて 相変わらずの きかん坊でした。

新五郎爺さんは 妙な言葉を使う癖がありました。 例えば「大寿丸！ お茶を飲

もうや！」と、自分は命令を出さずに 言葉に賛成させるような言い方で、大寿丸は、

その言葉が大嫌いでした。「俺は飲まぬ、シンゴジー一人で沸かして飲め！」と言う

ように、新五郎も 大寿丸には手こずっていました。

大寿丸に 縄の綱い方を教えても 上手に作る事ができませんでした。 それもその

筈、大寿丸の指の間には 河童独特の水掻きがあり、それが邪魔して上手くできない

のです。 太いところや細いところがあり 不揃いで、大寿丸も「俺には向いていな

い！」と投げ出してしまいます。

新五郎は 大寿丸に「人生というのは縄と一緒に、良い時もあれば 悪い時もある、

努力すれば良い方に向かうので、頑張れ！」と、励ましました。

一方、千代は、心優しい女の子でした。「新五爺様、お茶が沸いたよ」と言つて、既にお茶の支度は出来上がっていました。

散らばった菓を綺麗に並べて、新五爺の手伝いもします。そのような千代を新五爺は、たいそう可愛がりました。

【人間になりたい】

新五爺は、千代を、このままカツパの姿に置いておくのを勿体ないと思つていました。ところが或る日のこと、千代は新五爺に相談を持ちかけました。

「新五爺様、アタイ人間になりたいのだけど、なれないでしょうか？」

新五爺は、「意外なことを・・・」と言つた顔をしましたが、内心では「しめた！」と思ひました。と同時に「自分の考えを読まれているのでは？」と、びつくりしました。

新五爺は、大寿丸と千代を呼び寄せて、人間の楽しさ、苦勞や辛さ、別れの悲しさなど延々と話し、人間としての心得を丁寧におしやしました。

「ところで大寿丸、聞いておくことがあるのだが、・・・」と言つて大寿丸に質問しました。「生き物には、何か取り柄というものがあるものだが、お前には何かがあるのか？」と聞きました。

「取り柄？ 役に立つ善いところ？ 長所？ 無い・無い、そのような良いところなど

一つも持っていない！」と、はき捨てるように言いました。大寿丸には、キュウリが好きなだけで、他に能はなかつたのです。このようなことでは、人間にはなれないと思いましたが。

今度は、千代の方を向いて、聞いてみました。「さて、千代だが、お前が人のために役立つ良いところがあれば聞かせてくれ」、千代は待つてましたとばかりに、語り掛けました。

「先ず、お茶を点てるが大得意、水汲み・子守・洗濯、中でも皿洗いは大得意です」人間になる熱意を十分、新五爺に示しました。

新五爺は、千代がカッパでいるのが勿体ないと思つていただけに、千代の人間になりたという情熱に打たれ、人間になる手順を教えようと考えるようになりました。

果たして、可愛い千代が、人間になつて幸せがあるだろうか？ カッパのままの方が良いのではないだろうか？ と苦しみました。人間の生活や仕事の辛さを知っている

老人 新五郎は、人間への薦めに対し、迷いに迷いました。

新五郎は、迷い、苦しみ、考え込んだあげく、千代を人間にすることと決めました。

新五郎は千代に念を押し、「人間になつて悔やまないか？ 人間になつたことを泣か

ないか？ お前が人間になつたら、この爺いと二度と会えないぞ」と付け加え、人間になる手順を教えました。

新五郎は、何故考え、苦しみ、迷つたのか、理由がありました。

copy

新五郎は、自分の命と引き替えに 千代に魂を移すことになり、果たして無条件に千代に移つて良いものかも考えました。

千代は 頭の皿から水がこぼれないように 両手で頭を押さえて、深々と「お願いします」と言つて お辞儀をしました。

【平尾川】

村の中央を流れているのが、平尾川です。川の中ほどに泉がありました。

新五郎は、千代に そこに行つてお願いするよう 言いつけました。

千代は、言われた通りに川に沿つて登つて行くと 平らな敷石があり、そこに

も深く青々とした 小さな泉を見つけました。そばに柿の木があり、水面に影を映

し としても幻想的で神聖な感じがありました。

千代は 新五郎に教わつた通りに、平らな敷石の上に立ち 掌を合わせて、「人間

になりたい、人間になりたい」と 二度眩きました。

しかし、泉の主からは中々返事がありません。千代は 新五郎様が言っていたこと

を思い出していました。泉の主は 千年も万年も生きていますので、年老いて耳が

不自由なのです。千代は ありつたけの大声で、「人間になりたい！ 人間になりた

い！」と叫びました。

暫くすると 水面に波紋ができて、一匹の大鰻が現れました。鰻は 長い白髭

copy

をはやした仙人鰻でした。大鰻は河童の女の子を見て、「誰に教わつてきたのじや？」と聞きました。「アタイは千代と申します。新五爺様に聞いてきました」と、礼儀正しく挨拶しました。大鰻は引き続き千代に尋ねました。「新五郎は他にも何か言わなかったのか？」

千代は少し考え、新五爺様が別れ際に言っていた言葉を思い出していました。

「お前と最後の別れじや、お前が人間になった時には わしは もうこの世にはいない、人間の一生つて 浅い夢を見ているようなものよ、達者で暮らすんだぞ、早く行きなさい！」と言つて見送つてくれたことを 大鰻に話しました。

大鰻は、新五郎が 魂を移す覚悟であることを悟り、千代に対し 人間になつてからの行いを説明しました。

【新五郎の家】

その頃 新五郎の家では、息子新左衛門の妻 松が 忙しそうに夕餉の仕度をしていました。まだ、お天道様が高いというのに、新五郎は早々と風呂に入り 夕食を急かせ そわそわしていました。

嫁の松は、普段の新五郎の動きではないことが気になり、何でそんなに急がせるのか 理由が分かりませんでした。

新五郎は「陽が高い方が良い」と言つて、神棚と仏壇に 嫁の松が造った刺身・煮物

copy

のお膳と焼酎を供えました。そして両手を合わせ、甲高い声でお祈りをしました。

「神様、仏様、ご先祖様、新五郎は只今より『永の旅』に発つこととなりました、

道中のお導きを宜しくお願い申し上げます」

と、お祈りを済ませ、松の造ったお膳や焼酎を全て食べ終えました。

そして嫁の松を呼び、「長い間 大変世話になった、ついでには頼みがある」と頭を

下げ、神妙な顔で松に頼みました。

「間もなくここに、女の子供が俺を訪ねてくると思う、そしたらその子をここに

子供として大事に育て、ずっと可愛がって欲しい」と頼み、床につきました。

その頃カッパの子 千代は、鰻仙人から人間になつてからの行いや注意すること

を、次のように申し受けていました。

「泉の畔に必ず花を挿すこと、春は椿の花、夏は野百合、秋には竜胆、冬には

石路の花を挿し、例え雷が鳴ろうとも、山犬が吠えようとも、決して花挿しを

忘れてはならない」と、厳しく諭しました。

千代は 鰻仙人の言葉通りに、目をつむり 手を合わせて 一生懸命に お祈りし
ました。

その時、柿の木の枝に残っていた最後の 一枚の葉が ひらひら と静かに舞い降り、
水面に小さな波を造りました。 そのうち 水面も元通りに静まり、夕空が映えた

水鏡となりました。するとそこに、新五郎様の顔が 浮かび映つて見えました。

copy

千代は思わず「あつ 爺い様……」と声を出し

ましたが、新五郎の顔は静かに消えていきました。

その時千代は、身体に妙な変化を感じました。

すると背負っていた背中の甲羅が無くなり、目が

瞬きし、手の小指の先が真つ直ぐに伸び、水掻き

も無くなつていました。

千代は嬉しくつて、このことを早く新五爺様に報告しなければと 急いで駆け下りて

行きました。

東シナ海に 夕日が落ちようとしています。 村々では何処も夕仕度、ヘツツイ(かま

どの煙が立ち昇り、風呂を沸かす竹の爆ぜる音が 夕闇の中に遠くまで響き渡つて

います。

家々ではランプに灯が点り、早い家では帳が降りています。

千代が 磯の近くの縄造り小屋に辿り着いた頃には、既に 日はとつぷりと暮れてい

ました。 小屋の入口に一筋の縄が、どこまでもどこまでも長く横たわっています。

千代は その長い縄を辿りながら、辿り着いたところは 平尾の庄屋、

平尾村之新五郎の家でした。 千代は、人間らしく可愛い声で、

「こんばんは 千代です。新五爺様は いらつしやいますか？」と声をかけました。



copy

【新五郎 旅につく】

「こんばんは！ こんばんは！」、千代は可愛い声で呼びながら雨戸を叩きました。座敷では、新五郎の息子 新左衛門と妻の松、そして子供の新太・休次郎の四人で食卓を囲んでいるところでした。

松は、声を聞いただけで直ぐに分かりました。「爺様が床に就く前に言っていた女の子ですよ！」と、新左衛門に説明しています。

新左衛門自身は一人っ子でした。生まれた子供は、新太と休次郎の男の子ばかりだったので、新五郎も新左衛門も女の子が欲しいと思っていたのです。

松は女の子に、「暗くなったのによく一人でオジャシタ！」と言って、お膳の一ヶ所を空け 座らせました。

新左衛門は、四歳の新太に 爺様を起してくるように言いました。戻ってきた新太は、「ジイサマは起きないよ！ トントンしても起きないよ！」、仕方なく松は、乳飲み

子の休次郎を抱いたまま立ち上がり、寝ている新五郎を起こしに行きました。仏壇の灯明と線香は、燃え尽きるところでした。

「爺様！ 爺様 起きて下さい、小さいお客さんですよ！」と、布団を叩いても身動きしません。一人手酌で焼酎を飲んでいた新左衛門も立ち上がり、新五郎の床に

行き 揺すり起こしましたが、爺様は全く動きませんでした。

新五郎は、床の中で息絶えていたのです。『永の旅』を覚悟しての旅姿でした。

copy

身に白装束を着け、白手甲、白脚半、左手に数珠を握り、右手に左纏りの繩をしつかり握り締めて、永い眠りに就きました。

ローソクが燃え尽きる時間から考えると、泉で柿の葉が落ち、水鏡に新五郎が映ったあの時に、新五郎の魂が千代に乗り移ったものと考えられます。

人間になった千代は、早くも人間の別れと言う悲しい出来事に直面することになりました。新五郎は五十四歳でした。

千代は、新五郎様が話してくれた人間の苦しみや辛さを、ただ漠然と聞いていましたが、最も信頼し慕っていた爺様との悲しい別れがひしひしと伝わり、涙がこぼれそうになりました。カツパの世界には、「死・別れ」と言う言葉はないのです。

「人の一生とは、浅い夢を見ているようなもの」と言っていた新五郎様の言葉が忘れられませんでした。

時の経過は 早いものです。

新五郎の七年忌法要を営むことになり、千代も十五歳になっていました。

千代がカツパであったことを知っているのは、新五郎と鰻仙人だけです。

千代は人間の楽しさ、仕事の面白さを感じ、山仕事に畑仕事・家事一切、特に海の仕事は村一番の働き者となりました。海に潜る海草採り・魚採り・貝採りなど、

村の男衆に負けることはありませんでした。

村の祭りが来ると、皆と一緒に晴れ着を身に着け、歌って踊って、それぞれ村中の

copy

にんきもの
人気者になりました。

ある時、親族一同の席で一人の客人が、「千代も年頃になったね！ まだ好きな男

はいないのか？」と、声を掛けました。

すると酔っ払った別の客人が、「これは世間の噂じゃけんど、月之介が千代のこ

とを好いと言っている、千代はどうなんだ？」と、聞きました。

千代は顔を真っ赤に染めながら、「それは噂ですよ、そのようなことは知りませ

ん！」と、言い放ちました。ところがこの噂話、只のうわさでもなかつたようです。

千代が何時ものように、藪椿を持って泉の方に向う時、川下で策・鍬を洗っている

二世殿に声を掛けられました。

その青年は二十歳、名を月之介と言いました。顔は真丸で色は黒く、いつも夢を

見ているような目で遠くを見ているようです。

「おおい千代！ お主は何時も泉の所に花を持って行くが、何か理由ありそうだ

なあ！」と、話し掛けられました。「アタイは、約束を守っているだけ！」と言って、泉

の方へと急ぎました。

月之介と千代の会話は、たったこれだけでしたが、村人達は、「あの村念仁の月之介

が、千代にだけ声を掛けた」となると、もう黙っていられなくなつたようです。

子供達まで、「ボクネンジンの丸顔で、色黒ドンの月之介！」と呼ばれるくらい

無愛想な青年でした。

copy

ところが、千代に会ってからは 人が変わったように 村人にも挨拶をし、いつも笑顔
で働き者になりました。

話を聞いた新左衛門は、根っからの世話好きでしたので、この話をどんどん勧めま
したが、千代は ずっと庄屋の娘で居たかったので、一向に笑顔を見せませんでした。

一方 月之介は、村人が言ってくれた噂話を大層喜んでいました。それもその
筈、千代は、村一番の器量良し、働き者で、しかも歌や踊りが上手、その上中々の
美人でしたし、また 学問にも優れ、郷土か地頭の嫁になってもいい位の見識を持つて
いました。この噂には月之介だけではなく、月之介の父 星之介までも大変喜んで
いたのです。

ある日、星之介親子が正装し、庄屋様の家を訪問しました。星之介は、なにやら
ゴチャゴチャとご挨拶をしていましたが、要は、新左衛門の養い子千代を、月之介の
嫁に欲しいと言うことでした。

月之介は、今日の日のために練習に練習を重ねてきましたが、千代を前にして 吃
り吃りしながら、「村の噂がこのようになってしまった、宜しければ拙者の嫁になつて
下さらぬか？」と、武士言葉で 精一杯申し込みました。

朴念仁の月之介が、一生懸命に話す姿に 吹き出すのを堪えて、「よろこんで……、
嫁にさせて下さい」と、返事をしました。めでたし、めでたし、

copy

元々星之介親子は、琉球 古波蔵村の生まれでしたが、アメリカの船(モリソン号)で薩摩湾に入港しました。しかし、島津久風軍に砲撃されて逃げ回り、水を求めて密貿易港の平尾港に入港しました。

御通司(通訳)としてウチヤン(日本)に来ていましたが、この港の平尾で下船したのです。因みに、名前についても語ってくださいました。

琉球地方では、生まれた時 最初に目についた物を名前にする風習があったそうです。星之介の場合は、宝石を散りばめたような 雲ひとつない澄みきった夜に生まれ、星の輝きが 特に目についたそうです。

月之介の場合は、宮参りの時 隣の宮司が泡盛を喰らい、酔っ払って星之介に言ったそうです。「星之介！ 外に出て見ろ！ 空に太い星が出ているぞ！」と言うので外に出て見たら、大きな 大きな満月が空に浮かんでいたそうです。それで 月之介となったそうです。

【 婚 礼 】

結婚式には、村人はもとより 近郊の郷土・地頭など 数多くの人達が集まり、盛大に行われました。

花嫁千代は、仏壇に向って合掌し 涙を流しながら、亡き新五郎爺様に結婚の報告をしました。泣きながらの報告だったので よく聞き取れませんでした、

copy

「人間にして頂き、有難うございました、ずっと庄屋の娘で居たかったです……」
と言ったようなことだったそうです。

【そして晩夏】

盛大な婚礼を終え、早二年が経ちました。竜胆の花が咲き誇る頃、月之介と千代
の間に子供が生まれました。

目鼻だちのくつきりとした琉球人そっくりの可愛らしい女の子です。

名前を『京』と付けました。

千代は、子供が生まれてくるまで、一つの不安がありました。それは、生まれてく
る子の体が正常であるか、もしも頭に皿が……、背に甲羅が……、小指の曲がり
は……、目が瞬きするか……、全てが気になっていました。

でも、その心配はありませんでした。神様は、五体満足な子をお授けになり、とて
も感謝しています。

そして一年余りが過ぎました。

つわぶき はな こがねいろ ばんしゅう のうはんき はい かんしよほ ひぎま ふゆじたく
石路の花が黄金色になる晩秋から農繁期に入り、甘藷掘り、麦蒔き、冬支度など、
一年で最も忙しい季節となります。

copy

あまりの忙しさに、石蓐の花を挿しに行くのが遅れて、まだ泉の畔に行っていないで
ました。

麦の黄色の芽が出揃う ある日のこと、何となく肩が凝ったのか 背中が重く、また
目の瞬きも不自由さを感じていました。

その時、「ハッ！」と気がつきました。

まだ、石蓐の花を挿しに行っていないことを思い出しました。 急いで石蓐の花を探し
に駆け回りましたが、既に石蓐の花は色褪せて 黄金色の花は一本もありませんでし
た。 仕方なく、色褪せた石蓐の花を摘んで 泉の方へと急ぎました。

しかし、走っている途中で 目の瞬きが止まってしまいました。

やつとのこと、泉の畔につきました。

澄んだ水は、何時もの通り 鏡のように美しく映えていました。

その時、水鏡に写った千代の姿は、なんとカップの千代でした。 千代は元に戻つて
しまったのです。 千代は夕暮れの天を仰ぎ、大きな声で泣きました。

そして、「新五爺様！ 鰻仙人様！ どうぞお許し下さい、約束を忘れてしまいま

した」と叫びましたが、その声は空しく天に消え、また 落ちた涙は泉の中へと消え

ました。 涙は泉から川へ、川から海へと流れ、最後に砂浜に打ち上げられて、赤い
真珠になったとのことです。

copy

家では、京が千代の姿を探し求めて泣きじやくり、涙と鼻汁でグチャグチャになっていますが、日暮前の家の中は薄暗く、泣き声だけで京の姿を見ることができません。

カツパは、家の敷居を越すことができないように生まれているのです。

家に入ることができないカツパの千代は、ただただ家の周りを何回も何回も走り回るだけで、その様子はそれはとても惨めで悲しく哀れな姿だったようです。

山仕事から帰ってきた月之介は、泣き叫ぶ京を抱き千代の姿を探しました。しかし、どこを探しても千代の姿は見当たりませんでした。

東シナ海の水平線に真つ赤な夕日が沈む頃、月之介と京の足元を何か黒い影が

泉の方に向かって行くのが見えました。

その黒い影が何であったのかは分かりませんが、それ以来月之介も京も、そして

村人達も千代の姿を見た人は居ませんでした。

夕暮れになると毎日泉の方から、「キヨ！」と鳴く声が聴こえてきます。

あの鳴き声は、カツパの千代が我が子恋しさに「京」を呼ぶ声で、今でも泉の畔で、血の涙を流しながら泣いているとのこと。そのため、砂浜には『赤い真珠』が

沢山見つかるそうです。

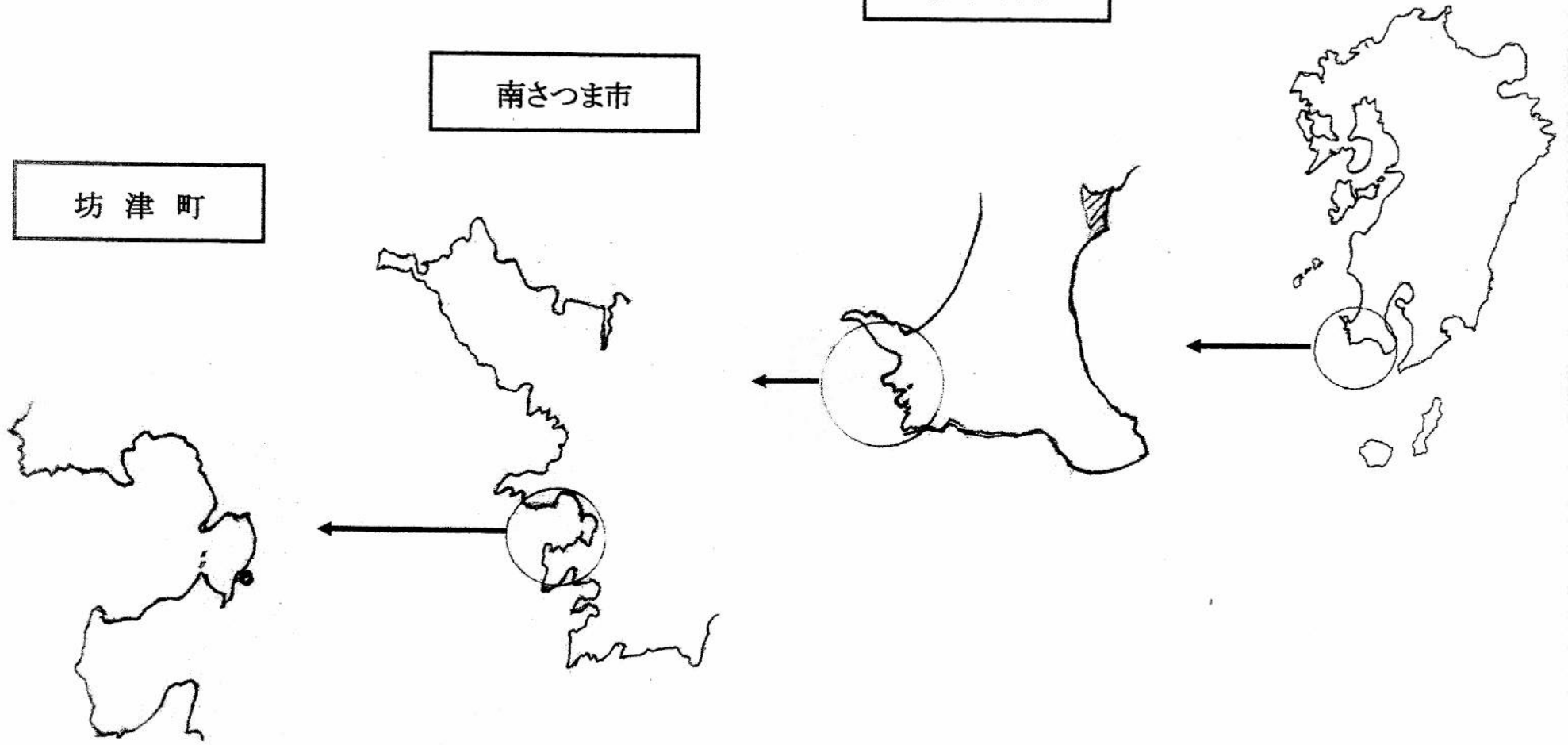
copy

九州

薩摩半島

南さつま市

坊津町



copy

【参考】

今から六十一年前（一九四五年）

密貿易港、平尾村を訪ねた時のことです。

雨の前なのか 気圧が低いと見えて、便所の堆肥が臭っていました。その近くの小屋で薬仕事をしている年寄りの人と出会いました。

傍らに、孫娘だという小柄な子供が悲しい声で、「おつかさんの涙は 血の涙……」と唄いながら、薬を揃えては年寄りに渡していました。

余りにも哀愁をおびた唄い方に、心を打たれた私は 血の涙 のわけを年寄りに聞くことにしました。そして、『赤い真珠』の意味を やっと理解することができました。

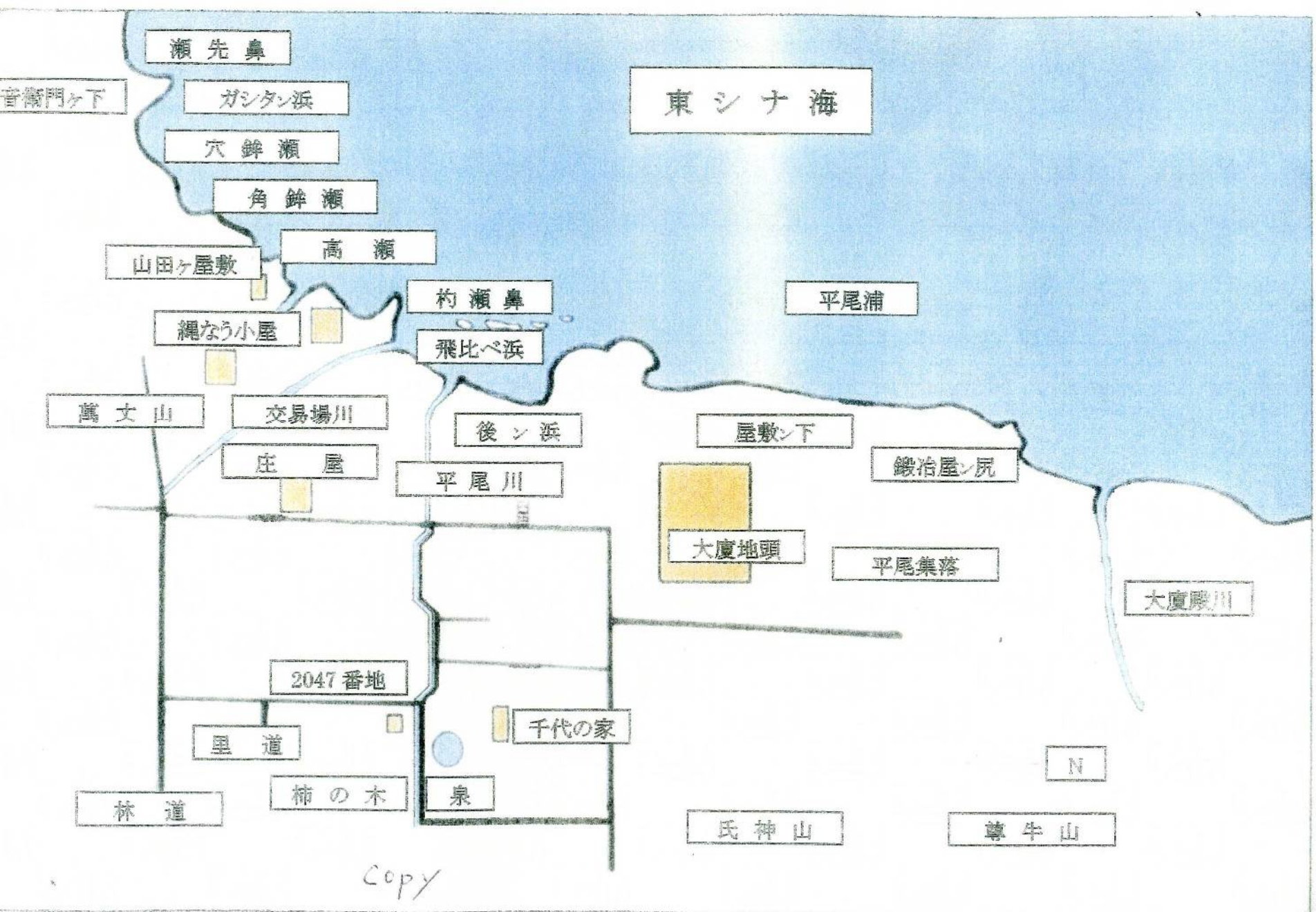
その年寄りには、マハトマ・ガンジーに良く似た 彫りの深い人で、物語を上手にお話しする 優しい人でした。

千代が、人間の魂を授かった時に立った 平らな石（洗い場）は、今でも平尾川畔にある屋敷内に保存されていると言われています。

一度、現地を訪ねて 実際に探して見ませんか？ 河童の女の子が待っているかもしれないよ！。

平成十八年（二〇〇六年）十月二十九日

copy



瀬先鼻

東シナ海

音衛門ヶ下

ガシタン浜

穴鉾瀬

角鉾瀬

高瀬

山田ヶ屋敷

縄なう小屋

杓瀬鼻

平尾浦

飛比べ浜

萬丈山

交易場川

後ノ浜

屋敷下

庄屋

鍛冶屋ノ尻

平尾川

大慶地頭

平尾集落

大慶殿川

2047番地

里道

千代の家

N

林道

柿の木

泉

氏神山

尊牛山

Copy